

## 3-02 心理面を理解した関わりと作業遂行を通じた称賛により ADL が改善した事例

○戸井 基茂(OT)<sup>1)</sup>, 西田 齊二(OT)<sup>2)</sup>

1) 医療法人社団向陽会 向陽病院

2) 四條畷学園大学 リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

Key word : (統合失調感情障害), 不安, ADL

【はじめに】不安から依存的な言動のある事例に対して作業療法士(以下筆者)は、依存したい気持ちの受容と事例の作業遂行に対して称賛して関わった。その結果、ADLの改善が見られた。この経過について考察を踏まえ報告する。尚、当発表は当院の承認と事例の同意を得ている。

【事例紹介】70代前半、女性、統合失調感情障害。X-38年、幻覚妄想や気分変動が見られ発症。入退院を繰り返しながらも仕事をして独居生活を送っていた。X-18年の入院では「一人では生活できない」と自宅を処分した。X-2年、右下肢が浮腫を呈し、転倒し歩行器移動となる。X-2か月、右浅大腿静脈・左後脛骨静脈血栓症と診断され、専門病院に転院。X年、当院に再入院。X+2年、看護師より筆者に事例の移動能力の向上の依頼あり。

【作業療法評価】3階の開放病棟に入院中。希望は入院の継続。転倒の不安から歩行器移動。しかし、楽しみである週5回珈琲を飲みに行く時は、階段昇降時職員が見守り、歩行器を使用せず移動している。精神障害者社会生活評価尺度(以下LASMI)は日常生活(2.1)対人関係(1.2)労働・課題(1.6)持続性・安定性(5.5)自己認識(2.7)。Timed Up & Go Test(以下TUG)は9.9秒。服薬(クロルプロマジン換算)量は200mgで介入期間中変更なかった。

【介入方針】週2回売店に行く際、不安を受容しつつ、好きなカラオケを促して関わる。そして、独歩の距離が伸びたことや歌唱を称賛し、自己効力感を高めることで、転倒への不安の軽減を図る。

【経過】1週目、事例は「“歩行器が無くて歩ける”と言われる」と歩行器を外されるのではないかという不安を話した。筆者は「歩行器がないと怖いのですね」と関わった。事例は「階段の昇りは出来そう」と話すようになった。2週目、売店へ行った後、筆者の提案で別の場所へ移動し、カラオケをするように

なった。筆者は独歩の距離が伸びたことや歌唱を称賛した。事例は「楽しいね」と笑顔で話していた。4週目、筆者は1人で階段を昇ることを提案した。事例は不安を訴えたが、階段の降りは職員が同伴すること、階段昇降はリスク管理できていることを伝えたとこ、1人で階段を昇れた。

【結果】介入6週目、過小していた自己評価が改善し、他の職員同伴時も1人で階段を昇れた。それに伴いLASMIの労働・課題(1.4)自己認識(2.0)と改善した。TUGは10.6秒。

【考察】事例は地域生活の破綻を繰り返した結果、自立した生活を送ることに不安を感じ、病院に依存するようになったと考えられる。病院内で出来るが増えれば、自立した生活を強いられるという不安が根底にあると考える。独歩で移動できる能力はあるが、歩行器や職員に依存していることも自立することへの抵抗を表すために生じている言動と推察した。そこで筆者は、まず歩行器に依存したいという気持ちを受容して関わった。結果、安心を感じたため、出来ない自分を表現する必要が減じ、本来の能力に見合った事が言えたと考えられる。また、階段の昇りが自立したことについては、階段の昇りに限定したことで、降りは職員に依存出来る安心感があった。また、独歩の距離が伸びたことや歌唱の称賛により自己効力感が向上したことが影響したと考えられる。作業療法の役割の一つとして対象者の背景因子から心理的な不安を評価、推察すること。また作業遂行を通して不安への共感を示すことで、まずはその軽減を図り対象者の本来の能力を引き出すことが重要と考えられる。今回のような階段の昇りというADLの一部分からのアプローチは、事例の生活に直接影響する部分であり、不安への共感とその軽減により生活機能自体の向上も期待できるため重要であると考えられる。